

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (九)

名古屋市立大高幼稚園



ぼくクラスの世話係だよ

砂場の近くで、ひろゆきを中心に�て男児のグループが、「だるまさんがころんだ」とか「あぶくたつた」「宝とり」などを�て遊んでいた。みんなが遊んでいる中でひとりよしのりは、かわつた参加のしかたをしているのが目についた。よしのりは仲間に加わっているのではない。宝とりゲームのときグループをふたつにわけけるために、じゃんけんをしていると、そばでみていて勝ち負けの判定をしたり、どっちに行くか迷っている子どもがいると、うしろから押してやったり、いろいろと世話をしていた。友だちの紙ひこう機が木にひっかかったのをみて、

「どっつ」

といいにくる。

「よしのりくんのか？」

ときくと、

「ちがうよ、ひろゆきちゃんの」

というよな調子で、いつも、男児のグループの世話係をして楽しんでる。

◇ ◇ ◇

よしのりは遊びの中に入らず、外から友だちの世話をするこことにより、自分もグループの一員であるという喜びがあるように思う。またいつかは自分も遊びの中へ入ろうと思つているのではないだろうか。しかし、友だちのこことになると、教師にこたわりなくかわつてくる。よしのりのある一面が、うきぼりにされたひとこまであった。教師は子どもを多面的にみられるように努力しなければならぬ。多面的にみられるよなになると、教師のその子どもへの接し方もかわつていかなければならぬ。

(五歳児 十一月十六日)

ぜったい ぼくやるよ

きょうは十一月の誕生会である。

昨日誕生児の子どもたちに、

「先生も何かしてあげたいと思うけど、

どんなことがいいかしら？」

ときいてみた。みつ子が、

「人形劇がいい。」

という。子どもたちは人形劇の何をしてほ

しいか、いろいろ題をいう。その中に三匹

の小豚があつたので、

「三匹の小豚、おもしろいからいいね、

でも先生ひとりではできないわ」

というと、子どもたちから、

「やる、やる」という声があがった。

「じゃ、先生おおかみやるから誰か小豚

さんしてくれる？」

というと、ほとんどの子どもが

「やる、やる」と手をあげた。誰にして

もらおうかと困ってしまった。せっかく、

みんながやりたいという気持ちをもって手  
をあげているので、どうしてきめようかと  
思ったが、じゅんたが、

「ぜったいやる。よく話知つとるから」

と力を入れていうので、

「じゃ、じゅんたちちゃんやってね」

といわざるをえなくなってしまった。結局

しんときみのふたりにもやってもらうこと

にした。きょう、じゅんたが登壇してくる

のに廊下であつたとき、

「ウーウオッホン」とへんな声を出し、

「のどは大丈夫かな」

という通りすぎた。一瞬なんのことかと

思ったが、はっと思いあたり、

「大きな声だせるかしら」

というと、

「ウワーッ」

と大きな声を出す。

「よかったね」

といったのだが、きょうの人形劇に対する

じゅんたの気がまえが感じられた。教師が  
舞台や人形の準備をしている頃、じゅんた  
は園庭で遊んでいた。

きみは、

「練習しないといかんもん」

といって人形をもち、きみとゆかと練習を

始めた。三匹の小豚のストーリーは、みん

ながよく知っている。特に昨日から自分が

するということのきままっているきみはスト

ーリー通りに進めていこうとするのだが、

ゆかはストーリーにあまりこだわらない。

「うちを作るう」

ということになったとき、それぞれが、わ

らの家、木の家というのだが、ちい豚にな

ったはずのゆかが、

「わたしも木の家」

という。みている子どもから、

「ちがうよ、レンガの家だよ」といわれ

ていた。教師がおおかみになって、その中

に加わりつぎに家をこわして、最後の

レンガの家になった時、ちい豚の家の中の  
ようすを表現するところで、きみが

「スープをになぎやいけないわ」

といっているのに、ゆかは、

「お風呂に入りましょう。ジャブジャブ」

などといっており、自分の遊びとして楽し  
んでいる。あまりストーリーにこだわら  
ず、ゆかのような子どもらしい話のすめ  
方で三匹の小豚ができたら楽しいと思っ  
た。誕生会をはじめの時刻になって、じゅ  
んたやしんが保育室にはいつてきた。この  
ふたりができなかつたら、ゆか・きみにし  
てもらってもいいと思っていたのだが、

「ぼくやるよ」

といって、はりきってやる気じゅうぶんで  
あった。結局、じゅんた・しんのふたりは  
ぶっつけ本番でやることになったのだが、

「これから、三匹の小豚をやります」

など、しんはなかなかしっかりやってくれ  
た。教師・じゅんた・きみ・しんの四人で

無事演じ終った。演じている子どもたちも

リラックスモードであり、みている子ども

たちもほんとに楽しそうで、いっしょうけ

んめいにみてくれた。終ったらゆかが、

「ああ、おもしろかった」

といっていた。しんに

「じょうずにできたね」

とほめたら、

「そりゃそうさ、夜までずっと本よんど

ったんだもん」

と当然でしようという顔で返事をした。

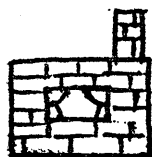
◇ ◇ ◇

朝のじゅんたのようす、きみの練習とい  
い三人の子どもたちはやるということ、

昨日からそれぞれが努力してきたのだ  
なと思った。

この意欲と努力に教師は心の中で最敬礼  
をし、子どもの成長の姿として心にかきと  
めたことである。

(五歳児 十一月二十七日)



香水もつけましょう。パッパッ

きのうのつづきで、美容院が開店した。

「先生、もうパーマ屋さんは、はじまっていますよ。ねえ早くきて」

とみさ子がよびにきた。その時手が離せなかつたので、

「あす、行きます」

という、

「早くきて、もうだれもこないんだからとせきたてる。本屋さんごっこに区切りをつけてお客にいった。」

「ごへすわってください」

「先生、何をやりますか」

ときのう作った「ばーま」「せつと」

「かつと」とかいた紙をみせてくれた。

「セットおねがいます」

と注文する。

「かつちゃん、先生、セットだつて、ち

よつと油とつて」

かずみは紙で型どったびんをみさ子にわたす。

「チューチュー」

とチューブから油を出し、髪になすりつけるしぐさをする。そして、くしでといたり、ピンでとめたりしてくれた。きのうは、みさ子ひとりできていたが、きょうは、かずみ、とし子たちもそれぞれお客を相手に活動していた。

「先生のうしろのかみ、ピンとはねるようにしなすう」

「あつ、香水もつけましょう。パッパッ」

といて香水びんを振るまねをする。

「はい、鏡をみてください」

「あら、すてきな頭になったわ、どうもありがとうございます。おいくらですか？」

「千円です」

教師の頭は、何とも無残なものであった。

三回目に入ったときは、ハンカチをきちん

とたたみ、パフにみたてて、

「おしろいで、お化粧もしますよ」

と顔をパタパタはたいてくれた。少しずついろいろな美容のしぐさが増えられ、現実に近い遊びになっていった。しばらくして美容院をみると、だれもない。

「きょうは、パーマ屋さんお休みですか？」

「お休みなの、わたしたちここが家で、

あそこへ働きに行ってるの」



子どもの遊んでいた場があいていると、

教師は、もうその場の遊びは終ってしまったと思ひ込んでしまう。ままごとに自分の安定する場をおき、他の場で活動をし、また帰ってくるといった、このような動きをたいせつにしてやるのが、遊びを継続させ、内容を豊かにすることだと思ふ。

(五歳児 十二月八日)